

# 美術科教育学会通信 No. 73

2010. 2. 25. 発行

## 通信事務

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1  
愛知教育大学 創造科学系 美術教育講座内 美術科教育学会本部事務局

事務局 E-mail/bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

藤江充(学会代表理事) - 研究室 TEL0566-26-2444

磯部洋司(事務局長) - 研究室 TEL0566-26-2447

竹井史(庶務担当) - 研究室 TEL0566-26-2443

樋口一成(広報担当) - 研究室 TEL0566-26-2449

〈三重大学〉上山浩(Web担当) E-mail/ueyama@edu.mie-u.ac.jp

第32回美術科教育学会仙台大会の最終案内が宮城教育大学から本部事務局に届きました。  
宮城教育大学から送っていただいた内容を下記に掲載させていただきます。

## 第32回美術科教育学会仙台大会のご案内【最終案内】

主催：美術科教育学会

共催：国立大学法人宮城教育大学

協賛：東北芸術文化学会、アトリエ・コパン

1. 会 期：2010年3月27日（土）・28日（日）
2. 会 場：せんだいメディアテーク1F・2F・7F（研究発表・研究部会・ワークショップ）  
せんだいメディアテーク1Fカフェ（懇親会）
3. 大会テーマ：メディアと美術教育

教職大学院が現職教員の再教育や、学校現場で即戦力となる新任教員の養成を目的に2008年春、19校でスタートし、2009年4月現在で24校が設立されています。そこでの修了要件に研究論文は課せられておりません。それは専任教員研修センターの焼き直しの観を深めるばかりであり、学問の府にふさわしくない負的特徴となっております。また最近の傾向としては、私立大学の小学校教員養成系学部・学科が續々と増設され、あたかもミニ新設ラッシュの様相を呈しております。

それほど数が毎年、文科省によって途切れることなく認可されているくらいですから、設置審議会で担当予定教員の論文が質量ともに基準に達しなかった、という話はほとんど聞かなくなりました。さらに学術的な業績が一向に問題とされない場面は、学部や大学院の改組に伴う教員免許課程認定委員会の業務において極まるでしょう。

1966年4月に東京学芸大学に大学院修士課程が新設され、それ以降1996年4月に高知大学に設置されたのを最後にして、教員養成の高度化計画は一応終了するに至りました。その間、文部省は設置を認定するに際しては、担当予定教員の資格を厳格に判定したはずでした。それに対して今から2年前に教職大学院を設けた大学では、研究活動と何ら関わらなくてもよい実務家教員を配置することが、条件であるとまでされております。

このように学術研究は全国の教育系大学への大学院設置完了以降、皮肉にも学校教育界で徐々に疎んじられてきています。教育実践を理論的に反省することなしに、教育的な価値の拡がりや意味の深まりをつくりあげることが、果たして可能なのでしょうか。教員養成系大学では実務活動だけが重んじられ、研究活動が軽視されるに至ってしまいました。そうした経緯を辿ったのは、一方で、学的成果を学校教育や教員養成の現場に反映させる努力が足りなかった、私たち研究者にも責任の一端はありましょう。他方で、本学会はほかならぬ「美術科教育」を看板に掲げているのですから、そうした事態に抗して組織体として果たすべき役割は、個人以上に大きかったはずで。

美術教育をめぐる能力育成論や題材論、教育課程論、メディア論的な仮説は、普遍妥当な理論として概念化と論理化の手続きを踏んで、形づくられなければなりません。またその教育効果を判定するためには、まず研究者が幅広い学識を発揮させて、信憑性の高い分析方法を案出しなければなりません。それに基づいて理論の有効性が、客観的に検証される必要があります。

純粋な立場から美術教育の価値を求めたり、教職の日常から一定の距離を採って、実践的な営みをより良いものにしようとするためには、考えることが不可欠であります。第32回美術科教育学会仙台大会には、そうした見識をお持ちの方々にも多く参加して頂きたいと思っております。美術教育ではいかなる能力・資質を高めていくべきなのか、どのような授業や題材が良いのかなど、教科の基軸を見つめ求めようとするような口頭発表が老若男女の研究者によってなされ、フロアとの間で活発な討議が展開されることを期待致します。

#### 4. 日 程

現理事会 3/26 (金) 14:00-17:00 第2会場 (2F 会議室)

##### 第1日 3月27日 (土)

新理事会 10:00-12:00	受付 12:00-	開会・総会 13:00-13:50	研究発表 14:00-16:00	シンポジウム 16:10-17:40	親睦会 18:00-20:00
---------------------	--------------	----------------------	---------------------	-----------------------	--------------------

##### 第2日 3月28日 (日)

受付 9:00	研究発表 9:30-12:00	昼食 12:00-13:00	研究発表 13:00-14:30	研究部会 14:40-15:40
------------	--------------------	-------------------	---------------------	---------------------

1F オープンスクエアでワークショップ等が行われます。(WiCAN/がんがんモリイ)

#### 5. 主 な 内 容

◎研究発表：51件の口頭発表を予定しています

◎シンポジウム：3月27日 (土) 16:10～17:40 会場：せんだいメディアテーク (smt) 1F  
「アート×メディアー社会をひらく、人をつなぐ」

シンポジスト：

- ・池田 修 (BankART1929代表) <http://www.bankart1929.com/>
- ・神野真吾 (WiCANプロジェクト代表・千葉大学) <http://www.wican.org/>
- ・佐藤 泰 (せんだいメディアテーク副館長) <http://www.smt.jp/>

コメンテーター：

- ・魯龍 (ノ・ヨン) (韓国造形教育学会会長・梨花女子大学大学院教授)

司会進行：谷口幹也 (九州女子大学)

◎研究部会：3月28日 (日) 14:40～15:40

\*「美術教育史研究部会」：7F スタジオb

\*「授業研究部会」 : 7F 会議室ab

\*「現代<A/E>部会」 : 1F オープンスクエア

(現代<A/E>部会) は「拡張された<美術/教育>の基本構造と可能性を考えるための部会」の略称です)

#### 6. 参 加 申 込 み 方 法

(1) 学会参加費…5,000円 懇親会費…3,000円

(2) 参加申し込み最終期限 と 参加費・懇親会費払い込み最終期限 : 3月16日 (火)

\*参加申し込み及び参加費の払い込みは、前回の学会通信発送時に同封させていただいている払込取扱票に必要事項をご記入の上、お振込下さい。

\*懇親会費の払い込みは、(今回の郵便物に) 同封の払込取扱票に必要事項をご記入の上、お振込下さい。

\*参加費振込み用の払込取扱票を紛失された方は、郵便局にある払込取扱票をお使いください。その際は、必ず払込取扱票の通信欄に「参加費5,000円」「懇親会費3,000円」などを明記してください。

※懇親会費払い込み用の「払込取扱票」を、今回、同封してお送りしています。

払込取扱票は白色（振り込み人負担）

口座番号：02260-5-116698

懇親会費：3,000円

口座加入者名：第32回美術科教育学会仙台大会運営委員会

※通信欄に「懇親会費3,000円」とご記入の上、

ご住所・ご所属・お名前・電話番号等を明記下さい。

※当日受付も可能ですが、大会運営上できるだけ事前にお申し込み下さい。なお、

3月16日以降は口座に振り込まず、当日受付にてお支払い下さい。

## 7. 移動方法

【空路】仙台空港より仙台空港アクセス鉄道で JR 仙台駅まで約 25 分（630 円）

【陸路】①新幹線等で JR 仙台駅へ（東京→仙台 所要約 95 分：10,590 円）

②東北自動車道・仙台宮城インターチェンジで下車

③高速バスで東京駅・新宿駅から仙台駅まで約 5 時間（3000 円より）

【JR 仙台駅からせんだいメディアテークへの移動】

① 仙台駅西口よりタクシーで約 7 分。

② 「定禅寺通市役所前経由交通局大学病院」行きで約 10 分、メディアテーク前下車。

③ 地下鉄「泉中央」行きで 3 分、勾当台公園駅下車。「公園 2」出口より徒歩 5 分。

④ 徒歩で約 20 分

8. 宿泊先案内：宿泊については特に容易しておりません。各自でお申し込みください。

※ <http://www.sentabi.jp/> をご参照ください。



## 9. 仙台大会に関する問い合わせ先

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149 国立大学法人宮城教育大学

第32回美術科教育学会仙台大会事務局

大会実行委員長

立原 慶一 (TEL・FAX：022-214-3449) (tatihara@staff.miyakyo-u.ac.jp)

大会副実行委員長

村上タカシ (TEL・FAX：022-214-3437) (murataka@staff.miyakyo-u.ac.jp)

# 第32回 美術科教育学会仙台大会研究発表等一覧

現理事会 3/26 (金) 14:00-17:00 第2会場 (2F 会議室)

新理事会 3/27 (土) 10:00-12:00 第2会場 (2F 会議室)

## ■第1日 3月27日 (土) 午後 (受付: 12:00- せんだいメディアテーク1Fオープンスクエア)

13:00-13:50	開会行事・総会	第1会場 (1F オープンスクエア)
-------------	---------	-----------------------

	第1会場 (1F オープンスクエア)	第2会場 (2F 会議室)	第3会場 (7F 会議室 ab)	第4会場 (7F スタジオ a)	第5会場 (7F スタジオ b)
14:00-14:25	協同的思考と問題解決を 基軸としたデザイン学習  新関伸也 (滋賀大学)	北原白秋と山本鼎の「童 心」思想の研究  関根史恵 (東京学芸大学 大学院院生)	総合絵画-複数美術作品 を言語で分析・総合させ る絵画制作方法  有田洋子 (常磐大学高等学校)	図画工作科においてコン ピュータを用いること の有用性  大島孝明 (富山大学大 学院生)・上山輝 (富山 大学)・隅敦 (富山大学)	図画工作科における授 業改善の一考察-学力 向上を目指した国語 科, 算数・数学科との 比較を通して- 宮崎敏明 (東松島市立 宮戸小学校)
14:30-14:55	キッズサイズデザイン・ プロジェクト<社会連携 活動の実践研究>  春日明夫 (東京造形大学)	美術教育は子どもの何を 見てきたか-1980 年代の 「教育美術」「美育文化」 から探る-  山田一美 (東京学芸大学)	大学院生を対象にした鑑 賞用教材開発実習の方法 と意義  山田芳明 (鳴門教育大 学)・山木朝彦 (鳴門教育 大学)	高校生のアートギャラ リー活用に関する一考 察-「アトリエ紹介ビデ オを作ろう! プロジェ クト」実践を通して-  奥西麻由子 (埼玉学園大学・川口 総合高校非常勤講師)	造形教育の質的向上を 目指すための課題-免 許更新講習の実施・考 察から-  降旗孝 (山形大学)
15:00-15:25	デジタル時代の生徒群像 -ロジカルな感動とアナ ログ的なコダワリ-  浅野恵治 (東京都立工芸 高等学校)	チャールズ・ゴッドフリ ー・リーランドのマイナ ーアーツ・エデュケーシ ョンについて-アメリカ における Arts & Crafts 受容についての一考察  大島賢一 (東京学芸大学 大学院院生)	パワーポイントを活用した パッケージ型鑑賞教育教材 の開発と授業実践  山木朝彦 (鳴門教育大学)・ 直井崇 (慶應義塾大学大 学院院生)・小浜かおり (鳴門 教育大学附属中学校)・福田 遼子 (鳴門教育大学大 学院院生)・青木成実 (鳴門 教育大学大学院院生)	絵本における彩色感情  姉川明子 (佐賀市立城 東中学校)・姉川正紀 (中村学園大学)	地域や社会の教育力を いかした美術教育  -地域や社会と相互作用を 結ぶ中学校美術科の授業-  岩崎知美 (横浜国立大 学大学院院生・川崎市 立臨海中学校)
15:30-15:55	3 DCG 表現指導におけ るピア・サポート学習活 動  上山浩 (三重大学)	戦後の美術科教科書にお ける掲載作品の研究-「平 和」に関連した掲載作 品の考察-  山口喜雄 (宇都宮大学)	主題表現法に基づく鑑賞 及び評価能力の育成  立原慶一 (宮城教育大学)	ペルソナ/シナリオ法 が保育者志望学生の見 立て描画指導力に及ぼ す影響  若山育代 (富山大学)	芸術表現としてのプロ ジェクトワークの実践 研究  村上タカシ (宮城教育大学)

16:10-17:40	シンポジウム	第1会場 (1F オープンスクエア)
-------------	--------	-----------------------

18:00-20:00 懇親会 (1F カフェ)

会期中 1F オープンスクエアで関連資料展示、及びワークショップ等 (3/28) を開催いたします。  
シンポジウム・ワークショップはせんだいメディアテークとの共催事業となっています。

■第2日 3月28日(日) 午前 (受付: 9:00- 1Fオープンスクエア)

	第1会場 (1F オープンスクエア)	第2会場 (2F 会議室)	第3会場 (7F 会議室 ab)	第4会場 (7F スタジオ a)	第5会場 (7F スタジオ b)
9:30-9:55	国・地域のブランディングと視覚文化の教育実践  畑中朋子 (拓殖大学)	ベルリン造形芸術大学における戦後第三代・芸術教育学者リューデン氏の課題意識について  安部順子 (神戸大学大学院院生)	高校生のための鑑賞作品の精選と鑑賞支援の方法-大塚国際美術館の収蔵作品(陶板名画)をベースとして-  亀井幸子 (徳島県立板野養護学校)	保育所におけるプロジェクト型保育についての考察  浅野卓司 (桜花学園大学)	昭和43年版小学校学習指導要領図画工作における「背馳する基準」の記述と考察  中村元隆 (東京学芸大学大学院院生)
10:00-10:25	シネリテラシーの取り組みを通じた「映像メディアによる表現」の意義と方法論に関する考察  柳沼宏寿 (新潟大学)	アメリカにおける亡命ヨーロッパ人芸術家たちの苦悩と学問的貢献: パウハウス出身学長 L・M=ナギの事例について  普照潤子 (神戸大学大学院)	対照性と類似性を基軸とした比較による鑑賞教育方法論  藤原智也 (兵庫教育大学大学院院生・岡山大学教育学部附属中学校)	美術教育の実践からより有意義な研究知見を導出するために: 心理学の手法を用いた研究アプローチの提案  縣拓充 (東京大学大学院院生・日本学術振興会特別研究員)・岡田猛 (東京大学大学院)	地域との連携によるものづくり教育活動の報告II  江村和彦 (名古屋短期大学)・加藤克俊 (愛知学泉大学)・藤田雅也 (名古屋経済大学短期学部)・西村志磨 (一宮女子短期大学)・樋口一成 (愛知教育大学)
10:30-10:55	デザインリテラシーとその教育に関する考察  村松美幸 (静岡大学大学院生)・伊藤文彦 (静岡大学)	シュトットガルト・アカデミー出身のモダニズム芸術家 W・パウマイスターにみる芸術教育と芸術教育観について  鈴木幹雄 (神戸大学)	小規模美術館によるコミュニティをくつくることの実践 楠本智郎 (つなぎ美術館)・犬童昭久 (熊本県立美術館)	マリーシェーフアーにおける音・形・色の研究  関口明子 (聖徳大学)	お散歩バックというメディア  葉山登 (川村学園女子大学)
11:00-11:25	2007 改正美術科教育課程と韓国の初等美術教育  李珠燕 (Jooyon Lee) (京仁教育大学校)	鈴木定次の手工教育観の再考察  齊藤暁子 (岐阜県半道小学校)	画像データベースを利用した鑑賞教育の実施と教材開発試案  直井崇 (慶應義塾大学大学院生)・原田健太郎 (オリンパス(株))・稲盛正彦 (慶義塾大学大学院)	ストレスマネジメントと創造性の関係から見た美術教育の可能性について 岡照幸 (東京学芸大学大学院院生/国立音楽大学附属小学校)	美術教育とキャリア教育の関連についての考察-服飾店における職場体験で実施する美術的活動は何をもたらすのか- 志藤浩仁 (新潟大学大学院院生・新潟市立大形中学校)
11:30-11:55	視覚文化・美術教育としてのメディア教育の拡張研究  朴香淑(パク ヒャンスク) (梨花女子大学校教育大学院)	手工教育濫觴期の研究(Ⅲ)  宮坂元裕 (帝京平成大学)	鑑賞の再構造化に関する一考察-子どもが発揮する「能力」から図画工作科における鑑賞をとらえ直すための試論- 大泉義一 (横浜国立大学)	描画制作過程における「知的処理」と「感性処理」-具象群と非具象群の分析を手がかりとして-  新妻悦子 (アトリエ・コパン美術教育研究所)	病院内学級での造形教材開発及び授業実践における課題  高橋智子 (静岡大学)

■第2日 3月28日(日) 午後

	第1会場 (1F オープンスクエア)	第2会場 (2F 会議室)	第3会場 (7F 会議室 ab)	第4会場 (7F スタジオ a)	第5会場 (7F スタジオ b)
13:00-13:25	Web 基盤デザイン授業設計モデル -問題解決学習を中心に-  魯龍 (ノ ヨン) (韓国造形教育学会会長/梨花女子大学校教育大学院)	図画教育・美術科教育における画の分類  山下暁子 (東京学芸大学大学院院生)	鑑賞文作成におけるメタ認知の学習効果  王文純 (インディペンデント・スカラー)・石崎和宏 (筑波大学)	保育者養成校における「造形模擬保育」での観察グループの役割  松井寿美子 (聖カタリナ大学短期学部)	制作活動における省察の役割  新井大樹 (筑波大学大学院院生)
13:25-13:55	Web 基盤デザイン授業設計モデル -問題解決学習を中心に-  魯龍 (ノ ヨン) (韓国造形教育学会会長/梨花女子大学校教育大学院)		鑑賞活動の可能性を広げる美術・博物館と学校 石川誠・西澤明・平林恵 石川誠 (京都教育大学) 山野英嗣 (京都国立近代美術館) 不動美里 (金沢21世紀美術館) 羽田聡 (京都国立博物館) 松村一樹 (京都市立安祥寺中学校) 田中聖子 (ノートルダム学院小学校) 西澤明 (金沢大学附属中学校) 平林恵 (金沢21世紀美術館) 西村大輔 (京都府立東陵高校) 竹内晋平 (佛教大学) 豊田直香 (京都国立近代美術館)		
13:55-14:25	韓国造形教育学会活動報告 魯龍 (ノ ヨン) (韓国造形教育学会会長/梨花女子大学校教育大学院)				
14:40-15:40	A/E 研究部会	アートセラピー研究部会	授業研究部会		美術教育史研究部会

# 報 告

## 東西合同地区会報告

### 美術科教育学会 2009 年度 東西合同地区会 報告

平成 21 (2009) 年 12 月 13 日 (日) に東西合同地区会を桜花学園名古屋キャンパスにおいて開催しました。今回の合同地区会はこれまでの公開シンポジウム、リサーチフォーラム、東西各地区会の趣旨をふまえながら、学会と教育現場との交流や地域の美術教育の活性化を意図して、東と西の真ん中にあたる名古屋の近郊で行いました。

#### テーマ

#### 「表現」と「図画工作」をつなぐ — 保・幼・小の連携 —

#### ■ 開催の挨拶

藤江 充 (学会代表理事・愛知教育大学教授)

#### ■ はじめの挨拶

宮脇 理 (東地区会統括理事・元筑波大学教授)

#### ■ パネラー

鈴木節子 (名古屋市立山根小学校長)

馬越恵子 (名古屋市立第三幼稚園長)

上野智恵子 (名古屋市立上飯田東保育園長)

#### ■ コメンテーター

宮脇 理 (東地区会統括理事・元筑波大学教授)

花篤 實 (西地区会統括理事・大阪教育大学名誉教授)

#### ■ 司会進行

辻 泰秀 (岐阜大学教授)

#### ■ おわりの挨拶

花篤 實 (西地区会統括理事・大阪教育大学名誉教授)

校種間の連携や幼・保一元化をめぐる議論は従来からありましたが、改めて新幼稚園教育要領・保育所保育指針において、小学校との連携が明記されています。行政組織や造形教育の研究会が異なると、どうしても相互の交流や理解が十分に行われません。ところが、共通する教材や教育方法は多く、連携によって子どもの発達に応じることがもできます。そこで、幼稚園と保育園、そして、幼・保の造形表現から小学校図工科へのつながりを意識して、幼・保・小の実践報告をしていただきました。

おりしも 11 月に名古屋で造形表現・図画工作・美術教育全国大会が開かれました。馬越先生と上野先生の園は公開保育の会場であり、鈴木先生は大会の基調提案を担当されました。合同地区会でも全国大会に向けて長期にわたって取り組まれた実践の成果を示して下さいました。

発表を受けた質問や意見交流の後、宮脇理事からは、美術科教育学会における研究会のあり方について、広く大衆へと訴える必要性があり、そのために出前シンポジウムやこの東西地区研究会があること、そして、この愛知での会が、東地区と西地区とが初めて合同で開催される会であり、この会で地区会の持ち方も一区切りになることが話されました。そして、今後も、大衆へと訴えていく美術教育研究の大切さを主張されました。



花篤理事からは、今回のテーマである幼稚園・保育園と小学校との連携、いわゆる幼保の連携を以前から試みられて来た経験を踏まえ、造形教育を通したそうした連携の意義と課題について、具

体的な事例をもとに話されました。そして、小学校の教員と幼稚園の教員・保育士とがこうした会をきっかけに相互に情報交換し交流することの大切さを主張されました。



また、このシンポジウムには、代表理事のほか、岩崎、増田の両副代表理事や関西、関東地区在住の学会理事も多数参加されました。

師走のご多忙な時期にもかかわらず約80名の方が参加下さいました。また、会場校の浅野卓司先生（桜花学園大学准教授）をはじめスタッフの皆様にも、大変お世話になりました。厚謝申し上げます。以下、パネラーの発表内容を中心に当日の様子を紹介します。

（報告：辻 泰秀）

---

## 1. パネラーからの報告

### （1）幼稚園からの報告

第三幼稚園は、文部科学省の委託により平成14年から近隣の名古屋市立那古野小学校との連携事業を行っています。現在も日常的に5歳児を中心として児童・職員との交流をはかっています。当日は、6月下旬に行われた「ウェルカムボードをつくろう」（この事例は小学校に入学した児童が幼稚園に招かれて遊ぶという交流活動）と、11月下旬に実施された小学校へ園児が遊びに行く活動（小学校低学年の単元「はっぱやきのみであそぼう」に

参加）が、報告されました。後者は、ドングリや木の実を使って数珠玉などをつくる実践で、児童が年長児の制作の手助けをする場面がスライドとして紹介されました。

報告終了後に寄せられた馬越先生のコメントには「幼稚園期には、身近な周りの環境にかかわる中で心動かす体験」が重要とされており「幼児の発達に応じて指導すること」や「表現や図画工作の活動につながるイメージの広がり遊びにおける経験として積み上がってゆくこと」として述べられていました。

このように第三幼稚園の園児が小学校や地域との連携を体験し、感じている生活の充実は、例年名古屋市博物館で行われている教育祭（園児の絵画展）で展示する絵にも表れているようです。

### （2）保育園からの報告

上飯田東保育園は、「愛知大会」に向けて2年間にわたり、0歳児から5歳児を対象とした造形表現活動について検討会や実践の公開を行ってきました。

上野先生は、報告の中で保育園の特色である0歳児から5歳児の子どもの発達段階による活動の違いや、幼稚園や小学校での生活と大きく異なり、子どもが園で過ごす時間が長い点をお話されました。低年齢児においては、子ども一人一人の育ちに寄り添った活動・遊びが十分に保障され、日々の生活に不可欠であることや、保育園においては表現が描画や造形活動というだけではなく、広義にとらえられていることにも触れられました。

「遊び」について、先生は「子どもにとって主体的な活動であり、人として成長していくためのあらゆる要素が含まれています。」とコメントしています。あらゆる表現活動のベースに遊びがあり、活動の連続性を踏まえながら、生活を充実させてゆくことが重要としている点は、幼稚園における「遊び」のとらえ方と大変共通していました。

上飯田東保育園では、5歳児が近隣の小学校へ見学する機会をもうけたり、小学生が保育園児と交流する活動も行っているようですが、今後は教師と保育士が積極的に関わる機会を増やすことが円滑な接続につながると述べられました。

### (3) 小学校からの報告

山根小学校の鈴木先生からは幼稚園・保育園とのつながりについて、造形遊びや絵画領域の内容と関連させ、小学校教育の特徴である教科書をもとにした報告がされました。

造形遊びでは、偶然できあがった色や形からストーリーが生まれることが、子ども同士の関係を深めることにつながり、イメージの共有や活動が広がっていく点を述べられました。また活動空間が、校庭や教室の廊下、校外などの屋外空間へ拡大することで、扱う素材の種類や活用の仕方が工夫され、学年ごとに大きく展開していく様子が伝わってきました。

また絵画領域においては、基底線が幼児期に出現することから始まり、低学年では基底線の位置を画面の上下にずらすなど、複数の基底線を用いることで奥行きのある表現に気づかせる指導についても触れられました。中学年ではこういった空間認識の発達をベースに、見たこと・聞いたこと・



感じたことを自分なりの表現で表してみたいという子どもの欲求や教師の指導観点について述べられました。そして高学年の活動は、空間的な遠近感や視点の違いを表現できること作例として紹介されました。描画表現における空間の広がりや、体験の豊かさに関連しており、造形遊びにおける制作空間の広がりや体験の積み重ねにおける認識の育ちが重要である点を強調されました。

小学校教育からとらえた「表現」と「図画工作」とのつながりについて、先生は幼児期の表現活動の特徴が、五感で感じたことを子ども一人一人が

十分に活かしダイナミックに表現していることにあり、小学校の限られた時間の中で子どもは入学前の遊びの体験を活かしながら表現しているとコメントに述べています。また昨今の図画工作の授業時間の削減とともに他教科の学習において心を掘り起こすための観察や体験を保障していくような、指導側の工夫も併せて検討することが課題であるとも述べられています。

## 2. 「表現」と「図画工作」をむすぶ

三人の先生から報告を受け、「表現」と「図画工作」をむすぶ取り組みの充実・活性化は、教師・保育者の「子どもの遊び」に対する解釈に違いがあることをまずは相互に理解することが重要であると感じました。「表現」「図画工作」の円滑な接続は、就学前後の体験の重複について、それぞれの発達・成長にふさわしい内容が体系化され、活動が教師・保育士によってしっかりと保障されなくてはなりません。そのためには連携をすすめる活動が、幼・保・小の現場においてカリキュラムの中にしっかりと位置づけられる必要性を感じました。

(報告：浅野 卓司)

## お知らせ

今年から会計年度が変更になりました。  
ご注意ください。

2010年度は、2010年1月1日～2010年12月31日となりますので、年会費の振込みに関して、特にご注意ください。



## 東地区会報告

### 2009 年度第 3 回東地区会フォーラム報告

地区会テーマ：

「変動する教育環境と

美術教育研究の新たな展開」

1. 日 時：2010 年（平成 22 年）1 月 10 日（日）

13：30－16：00【受付 13：20】

2. 場 所：東京家政大学・板橋校舎 16 号館  
161B 教室

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1、アクセス  
JR 埼京線「十条」駅下車、徒歩 5 分

### 3. 内 容

○開会の言葉 増田金吾 理事

○キーノート 13:40-14:00

結城孝雄（東京家政大学）

○研究発表（各 15-20 分）14:10-15:50

①後藤保紀「初等教育における椅子の鑑賞及び表現について」(東京学芸大学附属大泉小学校)

／②岡 照幸「ストレスマネジメントと創造性の関係から見た美術教育の可能性について」(国立音楽大学附属小学校)／③藤井康子「写真・映像メディアを活用した絵画教育内容の研究」

(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

／④和田 学「国民学校芸能科時代の美術教育」

(龍ヶ崎市立城西中学校)／⑤山田一美「カリ

キュラム構成法としてのワークショップとプロジェクト」(東京学芸大学)

○閉会の言葉 宮脇 理 理事

企画：東地区会 山田一美・結城孝雄

4. 出席者 13 名

### 5. 実施概要

この地区会の性格を、第一に仙台大会に架橋する研究発表として、またその後の大会に発表していくための方向性や視点を整理し、聴衆から意見を受けて、ブラシアップしていくためのリサーチフォーラムとした。

(1) キーノート／大きく揺れ動く現在の教育環境を踏まえ、まず結城孝雄さんがキーノート



を担当。教育現場の状況や年齢構成の変化、また学力形成・学級経営・小1プロブレム、コミュニケーション力の育成、安全など、子どもと教師の関係に対する課題に視点をにおいて包括的に。社会を支える「文化」の継承・発展の枠組みを、フランスの教育動向を事例に「多様性」をいかに許容できるのかをポストモダンの状況を描きながら提案し、本発表全体を方向付けた。

(2) 研究発表／後藤保紀さんは、椅子をつくる活動と鑑賞の関係に視点を置き、児童の学びの多様性についてまとめ、その成果を報告。岡照幸さんは、創造性を発揮できることが芸術療法の最終地点であることを見据え、心の安全地帯の確保を教育現場・家庭から唱え、子どもと教師の関係の改善点を指摘。藤井康子さんは、小・中・高で絵画教育はどのように変わるのか。絵画と写真、映像との関係の今後を、アンケート調査をもとに報告。和田学さんは、昭和13年の審議会案と昭和16年の国民学校発足時の芸能科における変化に着目。趣向や工作の歴史的背景を文部省への陳情資料や、国防関係資料等の新資料からの描出を企図し研究構想を披露。山田一美は、キルパトリックらのプロジェクト概念を参照しつつ、ワークショップ概念に触れ、それらの特質の差異を比較。

上記の発表に対して、会場から深く拡がりのある助言を得た。少人数フォーラムであったが有意義であった。以上、これらの発表内容は、静岡大学の芳賀先生に東地区会報告書として、レジメが掲載される。

(報告：山田一美)

## 「韓国造形教育学会」との 学術交流協定について

代表理事 藤江 充

会員の皆様には総会等でご承認をいただき進めてまいりました「韓国造形教育学会」との学術交流協定が正式に調印され発足しました。

2009年10月24日にソウル市の梨花女子大学で「韓国造形教育学会大会」が開催されました。その場で、藤江が、柳芝英先生（春川教育大学）の通訳のもと、日本の美術教育、とくに教員養成の紹介を兼ねた講演を行いました。その後、梨花女子大学の「真善美会館」にて韓国造形教育学会会長の魯龍（ノ・ヨン）梨花女子大学教授と藤江がそれぞれ署名した協定書を交換しました。（写真1）参加者は韓国からは、歴代会長3名のほか、学会の副会長や役員の方、計14名（写真2）が、日本からは、同行される予定であった仲瀬律久理事が風邪で訪韓できなくなり藤江だけの参加となりましたが丁寧に対応していただきました。協定の内容は理事会等での議論を経てまとめられたもので、具体的な交流活動については、今後、柔軟に対応できるように「実施要領」という形で署名文書とは別に決めました。（次頁にある協定書写し参照）

韓国造形教育学会は韓国国内でも歴史があり、美術教育の学術研究でも中心的な組織であるとうかがっています。韓国も学校での美術教育をめぐる状況は厳しいものがありますが、情報交換や人的

交流を密にして東アジア全体の美術教育の振興・発展につなげていきたいと思っております。

今年3月の仙台大会には、魯会長をはじめ何名かの韓国造形教育学会の会員が参加される予定です。韓国から美術科教育学会で発表される場合は、日本語か英語、または日本語通訳を準備するという形で、日本から韓国造形教育学会で発表される場合は韓国語か英語、または韓国語の通訳を準備されるという形になります。年会費は免除されませんが、参加費は支払うことになっています。また、韓国造形教育学会の大会についても、この『学会通信』でご案内をしていく予定です。

学術交流は始まったばかりですが、会員の皆様のご協力によって、実りあるものになっていくことと期待しています。この交流について、ご意見、ご希望等がございましたら、美術科教育学会本部事務局までお知らせ下さい。



## 学術交流協定書

韓国の韓国造形教育学会と日本の美術科教育学会は、両学会の学術研究の発展及び友好相互理解に基づいた協力のため、ここに学術交流協定の締結に合意する。

1. 両学会は、双方の自主性を尊重し、平等互恵の原則に基づいて、次の活動を行うものとする。
  - (1) 双方の会員の交流等
  - (2) 資料や情報の交換等
  - (3) その他、双方が必要と認める事業等
2. 前項の事業に関する実施要項は、双方の協議を経て定めるものとする。
3. 協定締結の有効期間は署名の日より3年間とする。  
ただし、有効期間終了1年以内に、いずれかの側からの申し出がない限り、自動的に3年間の更新がされるものとする。
4. この協定書は、日本語と韓国語でそれぞれ2通を作成し、双方とも保管する。

2009年10月24日

藤江 充

美術科教育学会代表理事

藤江 充  
(日本国)

2009年10月24日

李 龍

韓国造形教育学会会長

李 龍  
(大韓民国)

## 学術交流協定に関わる事業の実施要領

韓国の韓国造形教育学会と日本の美術科教育学会とは、学術交流協定の趣旨に基づき、以下のような条件において、相互に交流し、情報の交換等を行う。

1. 会員資格等  
両学会の正会員は、学術交流協定学会の正会員として、双方の主催する学術定期大会等での参加および発表する等の資格を有するものとする。
2. 会費等  
両学会とも、学術交流協定学会の交換発表者及び交換論文投稿者に対しては、学会費を免除する。
3. 学術大会での口頭研究発表等  
両学会の正会員は、双方の主催する定期学術大会、シンポジウム等に、参加・発表できる。ただし、学会参加費等はそれぞれの学会正会員の参加費等に準じて徴収する。口頭発表での使用言語は、その開催国での使用言語、又は英語とする。ただし、通訳などを必要とする場合は、発表者の個人の責任において確保するものとする。
4. 学会誌への論文発表等  
4-1 両学会の正会員は、相互に学会誌への論文を交換投稿することができる。ただし、論文は投稿先の学会誌を発行する学会の国の言語、または英語とする。  
4-2 交換投稿論文は、その会員の所属する学会での審査を経たものとし、投稿先の学会誌を発行する学会での審査を要しないものとする。  
4-3 交換投稿論文は、当分の間、双方ともに、1年間で1論文までとする。  
4-4 交換投稿により学会誌に掲載された論文については、その投稿者の所属する学会誌への再投稿又は再録(リプリント)等は認めないものとする。  
4-5 交換投稿論文の掲載にあたっては、双方の学会ともその掲載料を徴収しないものとする。
5. 必要経費等  
両学会は、上記の交流事業に伴う、旅費、宿泊費、保険料、送料等に関する財政的な負担は、原則として行わないものとする。ただし、それぞれの学会の公式事業として行う場合は、この限りではない。
6. 実施要領の改訂等  
この実施要領は、双方の学会からの申し出により、必要に応じて、改定したり、詳細を定めたりすることができる。

2009年10月24日 制定

## 「造形芸術教育協議会」における「合意事項」について

美術科教育学会代表理事 藤江 充

かねてより本通信で報告してきました美術教育関連の3学会（日本美術教育学会、大学美術教育学会、そして本学会）の連携協力に関する協議会が、2010年2月11日（木）、東京でもたれました。日本美術教育学会からは神林恒道会長始め役員の大橋功先生、新関伸也先生の3名、大学美術教育学会からは橋本光明理事長と山田一美総務局長の2名、美術科教育学会からは藤江代表理事と金子一夫副代表理事の2名の計7名が参加しました。3時間あまりの議論を経て、以下のような原則が合意されました。



○2月11日付けで「合意事項」に関する文書を作成し、各学会の代表者がそれに署名し、それをもとに各学会で検討し確定した「覚書」文書を作成し、あらためて各学会の代表者が署名、捺印するものとする。

### ○合意事項

1. 協議会の名称を「造形芸術教育協議会」とする。
2. 本協議会は、美術教育関連の組織が結集して、美術教育を振興していくことを目的とする。
3. 本協議会は、当面は、3つの学会（「日本美術教育学会」、「大学美術教育学会」、「美術科教育学会」）によって構成される。
4. 本協議会は、原則として年に1回は開催し、3学会の代表者等が集まり、連携の具体を協議する。  
そのために、各学会組織に本協議会担当者（学会役員兼任）を置き、活動費を予算化する。
5. 本協議会を構成する学会は、それぞれの全国大会や研究会等に関する情報を交換し協力する。

その他、当面する具体的な事業として以下のことを進めることが合意されました。

1. 本協議会を構成する学会の会員が、他の学会の主催する全国大会や研究会等に参加する場合には、それぞれの学会の会員に準じて参加できるように配慮する。
2. 原則として年1回は、本協議会を構成する学会が共催して美術教育関連の研究会等を開催する。
3. 必要に応じて「造形芸術教育協議会通信」（仮称）などの本協議会の広報誌を発行する。

美術教育関連学会の連携を進めようとする動きには、20年以上にわたる経緯があります。その間、さまざまな関係者が努力されましたが、合意内容を文書の形で残す前に、関係役員の交代などで、いつのまにか振り出しにもどるといふ繰り返しでした。今回の協議会の結成とその内容を文書で残すということはその意味で歴史的にも意義のあることだと思います。合意にしたがい、各地域で行われる各学会主催の研究会なども3学会の共催という形で呼びかけ参加者を広げることが可能です。この連携の成果が出るまでには時間もかかると思いますが、会員の皆様のご理解とご協力をいただき、日本の美術教育関係学会の力を結集して、より大きな力となることを期待できます。

# 報 告

## 理事選挙の実施に関する報告

選挙管理委員長 山田一美

学会次期理事選挙の実施経過について概要をご報告致します。

1. 選挙公示 『学会通信・第71号』(2009年6月発行)に告示
2. 投票期間 2009年9月初旬～10月10日(約1ヶ月間、消印有効)
3. 開 票 2009年10月17日(土)13:30～17:00、東京学芸大学
4. 開票結果

有権者への投票用紙郵送総数 502、投票総数 188(投票率 37.5%)、無効票数 6(8名以上の記入 5票、無記入 1票)、有効票数 182

5. 理事候補者への通知と承諾

開票後、直ちに選挙管理委員会を開き、得票順に上位 15 名を選出し、選出された会員に対して理事就任の承諾を求めた。その結果、1名の就任辞退者があり、次点者を繰り上げ当選者とし、通知・承諾を得て規程による 15 名の選出による次期理事候補者を決定した。

6. 開票結果報告会 2009年12月13日(日)11:00～12:00(名古屋市内)

選挙管理委員会は、選出された理事候補者を招集し、開票結果報告会を開き報告した。報告会后、理事候補者により会合がもたれ、投票によって次期代表理事候補者を決定した。また、規程に従い、必要に応じて理事候補者の補充、監事の選出等の業務を代表理事候補者に一任した。新理事・監事候補者は、3月仙台大会の総会において承認を得て、4月から新体制に移行する予定である。

7. 選挙管理委員会(5名)

相田隆司 会員(東京学芸大学)、新井哲夫 理事(群馬大学)、水島尚喜 会員(聖心女子大学)、山田一美 理事(東京学芸大学)、結城孝雄 会員(東京家政大学)

◎立会人 仲瀬律久 理事(聖徳大学)

以上

# 事務局からのお願い

## 本部事務局からのお知らせ

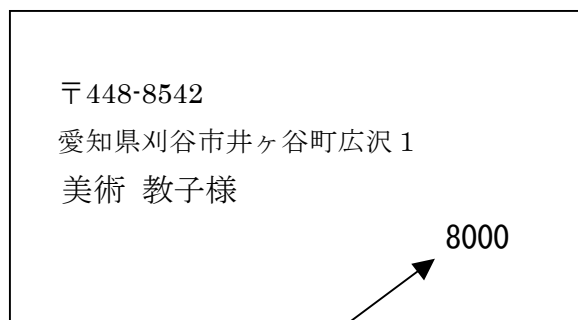
美術科教育学会本部事務局

### ◆会費の振込みのお願い

会計年度の変更に伴い、2010年度分(2010年1月～2010年12月)の会費の振込みをお願いします。

2010年度分の会費を含んだ額(振込み額)については、この通信を送らせていただいた際の封筒表面に貼ってあるラベル上の数字をご参照ください。

〈封筒に貼ってあるラベル(例)〉



この数字と同じ額をお振込みください

(例) 8000・16000・24000 など

※ ラベルに、-8000・-16000 とある場合は、すでに会費を多く払い込まれていることを示しています。ご注意ください。

※ なお、振込み済み等行き違いの節はご容赦ください。

※ 会費振込み額についてのお問い合わせは、本部事務局までお願いします。

[bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp](mailto:bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp)

「払込取扱票」がお手元にない方は、郵便局にある払込取扱票にて、下記の口座への振込みをお願いします。この口座番号は、学会HPにも掲載しています。

口座記号番号：00800-3-81908

加入者名：美術科教育学会本部事務局